

学校教育に環境教育を浸透させるには？

環境教育コーディネーターによる学校拠点方式の教師教育に関する検討

前園 泰徳

1. はじめに

環境教育とはどのような教育なのか、そして、学校教育において、現在どのような状況にあるのだろうか。「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律(環境教育等促進法)」(環境省 2011 年 6 月公布)では、「環境教育とは、持続可能な社会の構築を目指して、家庭、学校、職場、地域その他のあらゆる場において、環境と社会、経済及び文化とのつながりその他環境の保全についての理解を深めるために行われる環境の保全に関する教育及び学習」とされている。また、学校教育における環境教育の充実が定められ、具体的には、1) 教育活動における環境配慮の努力義務と、2) 学校教育における環境教育の一層の推進が記されている。

では、学校教育において環境教育はどのような状況にあるのだろうか。環境教育は、主に総合的な学習の時間で実践されてきた。総合的な学習の時間は、文部科学省の新学習指導要領によると、目標として「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」ことが挙げられている。ところが、実際の総合的な学習における環境教育は、上記の目的を実現するには遠く及ばない状況にあると言っても過言ではない(前園 2012)。なぜなら、環境教育は一部の教師に

よってのみ推進されている例が多く、その教員の異動によって実施頻度や質が著しく低下することが問題視されている(日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育分科会 2008)。また、体験やイベントそのもののみが目的化している例や(藤村 2008)、環境への気づきや行動までに限定されている例が多い(佐藤 2009)ことも指摘されており、質の向上が進まないことが問題視されている。

このような状況に至る背景には、様々な要因の存在が予想される。例えば、1) 地域に環境教育実践の核となる人や組織がない、2) 学校環境教育において現職教員の大半が、教員養成期間に環境教育や探究的学習についての履修経験がなく、教員採用後もその経験が乏しい、3) 教科書や指導要領がない、4) 環境教育の知見を共有する仕組みが少ないことなどである。

このような背景において、本研究では教師を対象としたアンケートを実施することにより、1) 教師にとっての環境教育とはどのような存在か、そして、2) 学校教育への環境教育の浸透を妨げている要因が何かを明らかにすることを目的とした。また、現状の改善に向けて、環境教育を専門とするコーディネーターが学校教育に加わった場合に、3) 従来の環境教育との間にどのような変化が生じるかを明らかにしたうえで、4) 今後の学校教育に環境教育を浸透させる提案を行うことを目的とした。

2. 方法

調査は福井県勝山市で実施した。勝山市は福井県北部に位置し、人口約 25000 人で、小学校 9 校、中学校

3校が存在する小規模な地方都市である。筆者は、2011年4月より勝山市が設置した環境保全推進コーディネーターに任命され、学校における環境教育とESD（持続可能な発展のための教育）の実践を中心に活動してきた。具体的には、筆者が頻繁に全小中学校を訪問し、学校拠点方式で計画段階から打ち合わせや職員研修を行い、日常的に環境教育やESDの授業をサポートしてきた。2011年と2012年では、いずれも学校の訪問回数は130回以上となってきたうえ、様々なステークホルダーと学校をつなぐ役目も担ってきた。筆者が関わってからの環境教育では、地元を客観的・科学的に見直して魅力や課題を明らかにし、探究的なアプローチで魅力を高める方法や課題の改善案を導きだし、メディアを通してそれらを地域の大人に発信していくというスタイルをとってきた。

本研究では、まず勝山市において、2012年11月に「これまでに総合的な学習の時間に環境教育を担当した経験のある小学校教員」48人（20～50歳代の男性17名、女性31名）を対象として、2010年まで教師自身が実施してきた環境教育についてのアンケートを行った。また、48人のうち、筆者がコーディネーターとして学校環境教育に参加してから一緒に授業を行った教師19名を対象として、以前の環境教育（2010年まで）と、コーディネーター参加後（2011年と2012年）の環境教育についての変化も調査対象とした。「これまでに総合的な学習の時間に環境教育を担当した経験のある小学校教師」対象のアンケートについては表1に、「コーディネーターとともに授業を行った教師」対象のアンケートについては表2に質問事項を記した。

3. 結果

(1) 「これまでの環境教育」に関するアンケートへの回答

表1の問1の結果を、図1に示す。複数回答の中から共通のキーワードを抽出して集計すると、従来は、ゴミ問題、地域の自然、エネルギー、地球温暖化などが主要なテーマとなっていたことが明らかになった。

問2の結果を図2に示す。図2からは、ほとんどの教師が教員養成課程において環境教育を学んでいないことが明らかになった。

問3の結果を図3に示す。教師として環境教育の研修を受けた経験の有無がちょうど半数ずつとなった。

問4の結果を図4に示す。環境教育を楽しみと思え

た教師は全体の17%しかおらず、約70%の教師は負担に感じていたことが明らかになった。

問5の結果を図5に示す。ほとんどの教師が、環境教育専門の教員を必要としていることが明らかになった。

問6の結果を図6に示す。テキストについては、65%が必要、25%が不必要と回答した。

問7の結果を図7に示す。約80%の教師が、環境教育と教科の関連づけを行っていなかった。

問8の結果を図8に示す。総合的な学習の時間における環境教育について、時間を有効に使えたと返答した教師は対象の3割弱のみであった。

問9の結果を図9に示す。複数回等の中から共通のキーワードを抽出して集計すると、教師が最も苦労したのは、年間の見通しを立てることであるということが明らかになった。

問10の結果を図10に示す。環境教育の授業において、不足していたのは知識と答える教師が圧倒的に多く、それ以外にも経験、専門家、時間、資料や教材、連携が不足していたという回答が得られた。

(2) 「コーディネーターとの環境教育」に関するアンケートへの回答

表2の問1の結果を、表3に示す。特に、テーマ設定、知識、視点、発信のありかた、児童とともに教師が学ぶこと、アドバイスが得られることなどを、従来の環境教育との違いとして挙げる教師が見られた。

問2の結果を表4に示す。コーディネーターが加わった授業における、児童の変化に対する回答では、子どもの興味や意欲に向上が見られたという記述とともに、勝山を好きになり、自慢できるようになったという記述が多く見られた。また、教師の変化については、児童とともに楽しむ、負担の減少、意欲の増加といった記述が多く見られた。

問3の結果を表5に示す。複数回答の中から代表的なキーワードを抽出すると、探究的な環境教育によって期待できることとして、身近な環境への意識の強化、正しい知識による大人の意識改革、郷土愛の増加、という回答が得られた。

問4の結果を図11に示す。約9割の教師が、探究的な環境教育の実施により、学力向上に期待ができると回答した。

問5の結果を表6に示す。コーディネーターを活用した環境教育への意見では、計画段階からの連携の必

要性、連携の継続、学校間の授業の公平性などについての意見が見られた。

4. 考察

環境教育の現状についてアンケートより明らかになったこととして、まず、教師は環境教育として広範囲のテーマを扱っている一方で、どこに焦点を絞れば良いか、どのように展開していけば良いのかの見通しが立たず、自信が持てないまま授業を行ってきたことが挙げられる。また、他教科との関連づけも大半で行われていないため、環境教育が学校教育において横断的な学習にならず、独立したものとして扱われているということを意味している。これまでの環境教育に不足していることとして、知識、経験、専門家、連携、資料などが挙げられていたうえ、環境教育の時間を有効に使えていなかったという意見が大変を占めたことから、従来の環境教育では、教師が授業に自信のない状態のまま、どのように改善すれば良いのかもわからない、という厳しい状況に陥っていたことが示唆された。これらの結果は、現体制のままでは、学校教育に環境教育が浸透することは極めて難しいことを強く示している。

環境教育が学校教育に浸透してこなかった要因としては、予想通り、教員養成課程において、ほとんどの教師が環境教育を学んでおらず、また、教師になってからも約半数しか研修を受けていないことが強く影響しているように思われる。このことが、知識がない、見通しが立てられない、誰に聞けば良いのか分からない、ことなどにつながり、調査対象とした教師の大半が環境教育に負担を感じていたという結果を導いたのだろう。さらに、環境教育にも専門の教師が必要であるという意見や、テキストが必要だという意見が多いことも、教員養成期間と教師教育において、具体的な知識や教材作成のノウハウを身につけていないことに起因すると思われる。福井県内では、福井大学を含め、現在でも大学の教員養成課程において実践的な環境教育を学ぶ機会がほぼないままである。これは世界的な流れや、今後の環境教育の浸透を考慮した場合、すぐにでも改善すべき状況であろう。また、調査対象の半数の教師が環境教育の研修を受けた経験を持っていたが、約7割の教師は自分が行ってきた環境教育に自信を持っておらず、時間を有効に使えたと思ってい

ない。この結果は、各学校の特性に合わせた実践的な環境教育についての教師教育が不十分であることを示唆している。「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律(環境教育等促進法)」(環境省 2011)では、「研修等教育職員の資質の向上のための措置を講ずる」と記されているが、本研究からは、それが具体的な効果を及ぼしていないことが示されている。

次に、環境教育コーディネーターが各学校に入ることによって生じた変化について述べる。内容の充実とともに、教師の安心感が増すことで負担が軽減するという回答が得られたことは、特筆すべきことであろう。コーディネーターが入った場合に、環境教育の内容が充実するのは当然であり、そうでなければ入る意味がない。それよりも、学校への浸透を図るうえでは、いかに教師の負担を減らすことができるかが重要なファクターとなるだろう。逆に、負担が増えるようであれば、コーディネーターも環境教育も受け入れられることは難しいはずだ。

コーディネーター参加後の児童の変化については、特に興味関心の向上や、自発的行動の増加の回答が多かった。これは筆者が徹底して身近な環境をテーマとし、探究的な手法で「当たり前」を見直すことの面白さを伝えてきたからこそ、得られた変化だと考えている。逆に言えば、いかに従来の環境教育では身近な事象を探究的に扱っていなかったが示唆される。教師の変化については、環境教育の時間を楽しめるようになったことや、負担の減少が挙げられているが、特筆すべきは、一緒に学ぶ姿勢が生じていることであると思われる。これからの環境教育には、教育そのものの質の転換が求められている。社会の担い手を育てる学校教育の果たす役割は、なおいっそう重要になっている(阿部・朝岡 2010)。その過程において、これまでの環境教育のように「自分が知識を教えなくてはならない」という姿勢から、「教師が子どもと一緒に学ぶ」という姿勢への変化は、学校教育への環境教育の浸透においても重要となると思われる。さらに、児童と教師の両方に見られた変化や、今後の環境教育に期待できるとして、郷土愛の向上が挙げられたことは、環境教育の主目的が持続可能な社会づくりとそれを担う人材育成であることを考えると(環境省 2011)、地域社会の持続可能性を高める第一歩と言えるだろう。

日本では、まだ長期的なスパンでの環境教育と学力の関係を論じる研究はない。また、環境教育という教科外の教育について、学力との明確なつながりを示した例もない。しかし、図 11 のように、探究的な環境教育が実践されれば、学力も向上すると考える教師が 9 割以上を占めたことは、今後の教育のあり方や、環境教育の位置づけ、さらに、環境教育で伸びる学力の種類などについて、あらためて考えることが必要であることを示唆している。

今後、学校教育へ環境教育を速やかに浸透させるために、必要なことはどのようなことであろうか。日本環境教育学会では、2010 年以降、現在環境教育の教科化と制度化をプロジェクト研究として推進している。しかし、教科化のためには、大規模な法整備、人材育成、教材作成、資金などが必要であることから、たとえ実現してもかなり先のことになるだろう。

本研究の結果から提案を行うとすれば、まず、大学の教員養成課程において、地域の特性に合わせた十分な知識と経験を得ることができ、さらに年間を通した計画や、連携体制の作り方を学ぶことができる実践的なプログラムを行うことが挙げられる。教師になったからの十分な研修時間の確保が難しいことを考えると、根本的な改善はこの方法以外にあり得ない。しかし、この方法は、上記の教科化と同様に実現にかなりの時間を要すると予想される。そこで現時点において最優先で行うべきは、教師教育の改善と考える。現状を短期間で改善させるには、効率的で効果の高い環境教育についての教師教育が必要である。しかし、現時点では教師教育に上記の条件を満たしたプログラムが皆無であるうえ、たとえそのようなプログラムがあっても、従来のスタイルの研修ではなかなか教師それぞれが自立して実践を行えるまでの成長は見込めない。その背景には、学校現場において、環境教育を推進できる教員の労働条件と校内体制が整っていないこと（小玉 2010）が挙げられるだろう。このような状況を考えると、勝山市のように環境教育の専門的な知見を有するコーディネーターが、学校拠点方式で日常的に学校における環境教育の一端を担い、現場において教師教育と授業のサポートを行う仕組み作りができれば、

授業や取り組みの質について自治体単位で比較的短期間で大幅な改善が期待できるうえ、教師の負担を減少させることにもつながる可能性がある。この提案は、図 5 と図 6 において、環境教育の専門教員が必要であるという回答や、テキストが必要であるという回答をする教師が多いことから、受け入れられる可能性が高い。環境教育のコーディネーターに必要な資質やプログラムの内容についての一般化には、まだまだこれから検討を要するが、勝山市のような小規模な地方都市で実施可能であったことは、他市町村でも実現する可能性が高いことを示唆している。今後は、表 6 の回答からコーディネーターの関わり方について改善を重ねることにより、先進事例としての知見を増やす予定である。

「教師が教える環境教育」から「教師が児童とともに学ぶ環境教育」への転換は、知識よりも考え方の学びを重視するようになった社会に生きる子どもたちを育成するうえでの教育の転換点の 1 つとなるとともに、教師が試行錯誤しながら前に進んでいく姿を子どもたちに見せる絶好の機会となると思われる。その転換が、学校教育に環境教育を確実に浸透させる礎になると信じている。今後も、学校との関わりを強く持ち続けることにより、教師と子ども、そして、子どもどうしが学び合う環境教育を構築し、そこから生まれる様々な成果を明らかにしていきたい。

5. 謝辞

本文執筆にあたり、勝山市教育委員会をはじめ、市内小中学校の多くの方に調査時にご協力をいただいた。勝山市の環境政策課や NPO 法人「恐竜のまち勝山応援隊」にも協力していただいた。特に、小林泰浩氏、平沢浩一郎氏、上田秋光氏には、多大なご配慮をいただいた。また、福井大学教職大学院のスタッフにも貴重な意見をいただいた。さらに、アンケートの集計やグラフ作成時には、東邦大学大学院の菅原みわ氏にお世話になった。心よりお礼申し上げる。

[参考文献]

- 小玉敏也(2010). 「子ども・学校・社会をつなぐ環境教育」, 小玉敏也・福井智紀編著『持続可能な社会のための環境教育シリーズ(3) 学校環境教育論』, 筑波書房.
- 阿部治(2010). 「まえがき」, 小玉敏也・福井智紀編著『持続可能な社会のための環境教育シリーズ(3) 学校環境教育論』, 筑波書房.
- 環境省(2011). 「環境教育等による環境保全の取組の促進に関する法律(環境教育促進法)」, 『環境省ホームページ: http://www.env.go.jp/policy/suishin_ho/kaisei_2011.html』.
- 前園泰徳(2012). 「環境教育をめぐる自治体環境政策の20年」, 環境自治体会議/環境自治体会議環境政策研究所編『環境自治体白書 2012年版』, 生活社.
- 日本学術会議環境学委員会環境思想・環境教育分科会(2008). 「提言 学校教育を中心とした環境教育の充実に向けて」, 『日本学術会議ホームページ: <http://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/pdf/kohyo-20-t62-13.pdf>』.
- 佐藤真久(2009). 「環境教育からESDへの展開」, 67 降旗信一・高橋正弘編著『現代環境教育入門』, 68 筑波書房.
- 藤村コノエ(2008). 「環境教育の現状と環境教育推進法の改正に向けた提案」, 『日本環境教育学会第19回大会研究発表要旨集』.

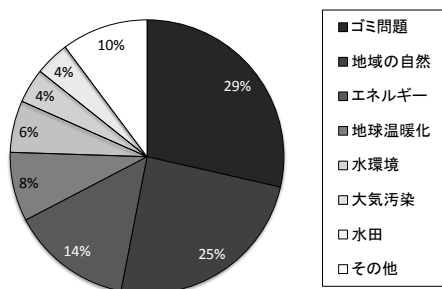


図1. これまでにどのような環境教育を行ってきたか、という問いへの回答(48人の対象者において、複数回答あり)。

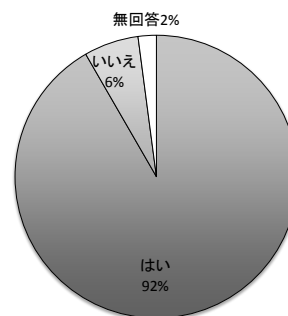


図5. 環境教育にも専門の教員がいた方が良いと思うか、という問いへの回答。

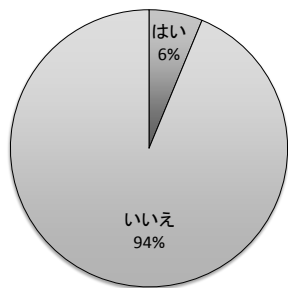


図2. 大学または大学院時代において環境教育の授業を受けたことがあるか、という問いへの回答。

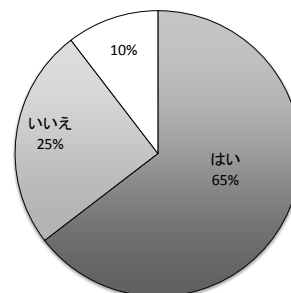


図6. 環境教育にもテキストがあった方が良いか、という問いへの回答。

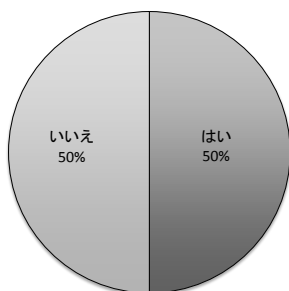


図3. 教員になってから環境教育の研修を受けたことがあるか、という問いへの回答。

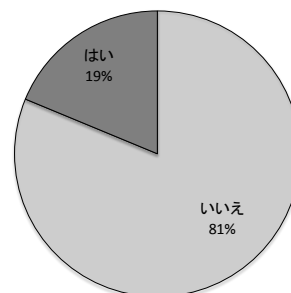


図7. 教科の学習において環境教育との関連づけを行ったか、という問いへの回答。

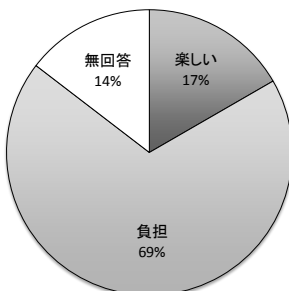


図4. 環境教育の授業計画についてどのような印象を持ったか、という問いへの回答。

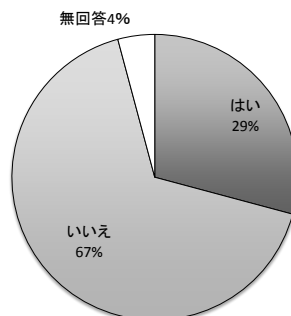


図8. 総合的な学習の時間において環境教育の時間を有効に使えたか、という問いへの回答。

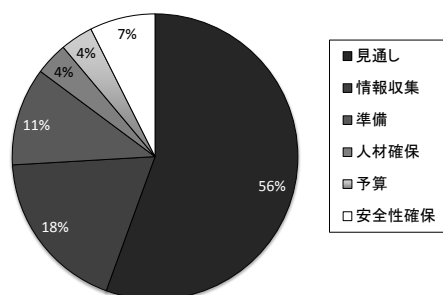


図9. 環境教育の授業で苦労したことは何か、という問いへの回答(48人の対象者において、複数回答あり)。

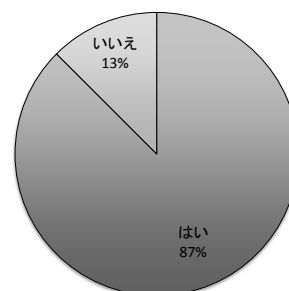


図11. 探究的な環境教育で学力の向上も期待できると思うか、という問いへの回答。

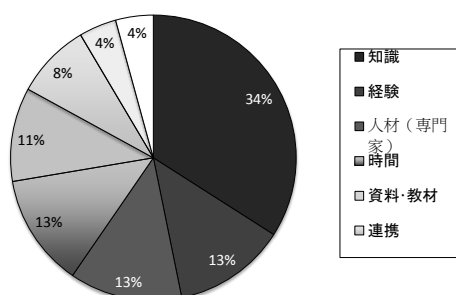


図10. 自身の行ってきた環境教育に不足していたものは何か、という問いへの回答(48人の対象者において、複数回答あり)。

表1.「コーディネーター参加以前の環境教育」についてのアンケート項目。

1. これまでにどのような環境教育を行ってきたか。
記述による回答
2. 大学または大学院時代に環境教育の授業を受けたことがあるか。
①はい ②いいえ
3. 教員になってから環境教育の研修を受けたことがあるか。
①はい ②いいえ
4. 環境教育の授業計画についてどのような印象を持ったか。
①楽しい ②負担
5. 環境教育にも専門の教員がいた方が良いと思うか。
①はい ②いいえ
6. 環境教育にもテキストがあった方が良いと思うか。
①はい ②いいえ
7. 教科の学習において環境教育との関連づけを行ったことがあるか。
①はい ②いいえ
8. 総合的な学習の時間において環境教育の時間を有効に使えたと思うか。
①はい ②いいえ
9. 環境教育の授業で苦労したことは何か。
記述による回答
10. 自身の行ってきた環境教育に不足していたことは何か。
記述による回答

表2. 環境教育に関するアンケート調査における調査項目。環境保全推進コーディネーターの授業への参加前後の環境教育の内容、児童や教師の変化を記す。

1. コーディネーターで行った環境教育と以前の環境教育の違いは何か。
記述による回答（複数回答あり）
2. コーディネーターが授業に入ったことでどのような変化が生じたか。

- ①児童の変化についての記述（複数回答あり）
- ②教師の変化についての記述（複数回答あり）

3. 探究的な環境教育の充実で期待できることは何か。
記述による回答（複数回答あり）
4. 探究的な環境教育で学力の向上も期待できると思うか。
①はい ②いいえ
5. コーディネーターが授業入った授業における改善点や希望があるか。
記述による回答（複数回答あり）

表3. コーディネーターで行った環境教育と以前の環境教育との違いは何か、という問いに対する回答。

- ・今までは、書籍などによる調べもの学習が中心で実感が伴わないもの足りなさを感じていたが、（自分の知識も不足しているので）実物を見ながら自分たちの住んでいる場所での話や活動ができることで、心で感じるものになった。
- ・児童の食いつき方が違った。また、気軽に呼べるので負担に思わずに授業ができるようになった。
- ・子どもたちは、いつでも詳しい知識を得る事ができるので、意欲的に取り組めた。
- ・専門的な話を聞けるうえ、困ったときにメールすると返事やアドバイスがもらえること。
- ・児童の目の輝きが違う。提示される資料のわかりやすさ、専門性によって児童の意欲が高められている。
- ・フィールドワークを常に意識した授業であるため、取り組みやすい。立場がコーディネーターという立場なので、打ち合わせや連絡が容易。情報発信が多様で、地域住民へのアピール度が高い。
- ・専門家ということもあり質問しやすかった。適切なアドバイスがすぐ得られた。
- ・新しい情報や正しい知識を得ることができたこと。
- ・大変具体的で分かりやすい説明により、子ども達がとても興味を持った。また、教員との打ち合わせでも年間の見通しがしっかり持つことができて助かった。
- ・当たり前のことだが、本物の言葉と本物の知識が子ども達をゆさぶっていると感じた。
- ・地域を見直すことで、今まで当たり前になっていて素通りしていた身近なことやものに目を止めるようになった（教員も児童も）。また、身近なものを取り上げていくため、授業時間外でも子ども達がすすんで活動することがとても多くなった。
- ・子どもと自然の中に連れて行き、地域の自然を生きた題材にして使うことができる。
- ・教員も子どもと一緒に学ぶ授業スタイル。
- ・もう少し難しいことをしないとイケないと思っていた

が、身近なことを関連づけて行えばいいということがわかった。

- ・全く知らない知識を得ることができた。
- ・具体的で豊富な知識。
- ・緊張感（児童も担任も）。斬新な視点。
- ・専門的な知識をもとに指導してくれることがよかった。
- ・知識。

表 4. コーディネーターが授業に入ったことでどのような変化が生じたか、という問いに対する回答。児童の変化と教師の変化をそれぞれ記した。

児童の変化：

- ・知らないことがたくさんあることを知る。
- ・興味関心の高まり。将来のゆめ（キャリア教育）にもつながる子ができた。
- ・知りたい事ある時、質問をすればすぐに正しい答えが得られるので、意欲的に質問できた。
- ・意欲が高まる。知識の獲得に難しさを感じない。劇的に態度が変化した（虫嫌いがいなくなる）。
- ・前園先生に安心しきっていて、子ども達の目は輝いていた。担任ができないところをいろんな資料などで教えて頂いたので子ども達のやる気を感じた。
- ・普段接している学校の教員ではないということで、児童の意識が高くなった。
- ・環境教育に大変興味を持つようになった。
- ・やる気を見せるようになった。
- ・子ども達は毎時間、前園先生が来ると何か新しいこと、自分たちが興味を持つことを教えてもらえる！と感じている。そのため、とてもその時間を楽しみにしているし、楽しい時間と認識している。
- ・生き物や自然と触れ合えて楽しそう。
- ・好奇心が旺盛になった（動植物についての疑問を答えてもらえるので）。大学等と繋げて頂くことで学習に対する意欲興味関心が高まった。勝山を好きになった。勝山を自慢できるようになった。プレゼンテーション能力が向上した。
- ・興味関心が高まった。どんどん質問し、意欲的に取り組んでいた。
- ・関心が高まった。
- ・見やすい、分かりやすい。身近なものとして捉えることができる。
- ・より専門的な知識が得られるということで子どもの目が輝いていた。
- ・身近な環境に目が向き、自然の素晴らしさに気付くようになった。
- ・豊富な視点からのものの見方を教えてもらい、身の周りの身近な環境に今更にして興味をもった。

教師の変化：

- ・一緒に教えてもらって楽しもうという気持ちになった。
- ・自分も環境について考えるようになった。
- ・児童とともに驚きをもって授業ができ、一緒に楽しめる

ようになった。

- ・教材研究をしたり準備したりする時間が少ないので、負担が軽かった。子ども達と一緒に学ぼうという感覚だった。
- ・情報発信が多くなり、身の回りの自然発掘に意識が向く。プレゼンテーションの仕上がりに工夫する必要性を痛感した。地域の自然の豊かさに改めて気付かされる教員が多くなった。
- ・とにかく、私にも環境について取り組むことができるという自信。
- ・本校では TT という関わりではなかったが、バードストライクということで関わってもらった。窓口の教員がコーディネーターからの情報を伝えて、学校全体で取り組みを考えることができた。
- ・より深く専門的な学習を行えた。
- ・やる気になった。
- ・授業を進めていく上でとても勉強になり、自分も子ども達と一緒に何か新しいこと、自分たちが興味を持つことを教えてもらえる！！と感じ、刺激のある時間で楽しくなった。また、授業がしやすい。授業準備も資料準備もして下さりありがたい。
- ・自分もやってみたくなる。
- ・自分も他の教員も、身の周りの物事に興味を持つようになった。ESD を意識するようになった。専門家のアドバイスを頂けるので、自信をもって授業ができる。
- ・自分が分からないことも、コーディネーターがいることで自分の勉強にもなる。
- ・勝山の環境への関心が高まった。
- ・見やすい、分かりやすい。身近なものとして捉えることができる。
- ・持続可能な社会づくりに対する意識の高まり。
- ・新しい発見がたくさんあった。

表 5. 探究的な環境教育の充実で期待できることは何か、という問いに対する回答。

- ・本で読んだ知識と経験を結びつけ、さらに興味をもったり、見つける目が育ったりすること。自分で行動すること。
- ・子どもたちがふる里を大切にする。子が大人を変えていく機会だと思う。
- ・文化祭等の発表などが、聞く大人にとってもためになり、生活を見直すきっかけになること。
- ・環境に関する正しい知識を身につけて守っていかうという態度が養われる。勝山の良さに気づき、郷土愛が育まれる。
- ・考える力が伸びる気がする。
- ・学力の向上。勝山を好きになり、地域に自信を持つ児童生徒の増加。勝山の環境が良くなる（ゴミの減少、動植物の多様性の保全）。観光客とリピーターの増加。
- ・児童の意識改革（親へ地域への発信源になる）。
- ・児童が、自分たちが生活している場所により一層関心を持つ。地元で生活する教員が地元を知ろうとする意識

- が向上する。
- ・他教科における調査活動の充実。学校・地域の環境の良化。
- ・勝山に限っていえば、どちらかというと自己肯定感の低い大人が多い現状から、ふるさとに自信が持てる大人（将来の大人）が増えていくと思う。
- ・子ども達が自ら自分の身の回りに目を向け、課題をもち、調べていこうとする態度が身につく。
- ・地域に愛着や自信を持つことができる。探究心、行動力、知的好奇心が育つ。
- ・意識の高い住民が増える。勝山を愛する人が増える。批判ばかりすることから提案したり実行したりする人が増える。勝山の教育レベルが上がる。勝山の人口が増える。勝山の人が幸せになる。
- ・大人の意識の変化。
- ・勝山の豊かな自然環境を守ろうという意識が高まる。
- ・環境に対する意識の変化。
- ・自身の町、県、ひいては日本を大切に思う気持ち。

表 5. 探究的な環境教育の充実で期待できることは何か、という問いに対する回答.

- ・本で読んだ知識と経験を結びつけ、さらに興味をもったり、見つける目が育ったりすること。自分で行動すること。
- ・子どもたちがふる里を大切に。子が大人を変えていく機会だと思う。
- ・文化祭等の発表などが、聞く大人にとってもためになり、生活を見直すきっかけになること。
- ・環境に関する正しい知識を身につけて守っていこうという態度が養われる。勝山の良さに気づき、郷土愛が育まれる。
- ・考える力が伸びる気がする。
- ・学力の向上。勝山を好きになり、地域に自信を持つ児童生徒の増加。勝山の環境が良くなる（ゴミの減少、動植物の多様性の保全）。観光客とリピーターの増加。
- ・児童の意識改革（親へ地域への発信源になる）。
- ・児童が、自分たちが生活している場所により一層関心を持つ。地元で生活する教員が地元を知ろうとする意識が向上する。
- ・他教科における調査活動の充実。学校・地域の環境の良化。
- ・勝山に限っていえば、どちらかというと自己肯定感の低い大人が多い現状から、ふるさとに自信が持てる大人（将来の大人）が増えていくと思う。
- ・子ども達が自ら自分の身の回りに目を向け、課題をもち、調べていこうとする態度が身につく。
- ・地域に愛着や自信を持つことができる。探究心、行動力、知的好奇心が育つ。
- ・意識の高い住民が増える。勝山を愛する人が増える。批判ばかりすることから提案したり実行したりする人が増える。勝山の教育レベルが上がる。勝山の人口が増える。勝山の人が幸せになる。

- ・大人の意識の変化。
- ・勝山の豊かな自然環境を守ろうという意識が高まる。
- ・環境に対する意識の変化。
- ・自身の町、県、ひいては日本を大切に思う気持ち。

問 14「コーディネーターと授業を行う上で、改善すべき点やご希望などがありましたら教えてください。」

2：子供たちに変化が見られるようになるためには、ある程度継続的なテーマでの活動が必要だと思います。

す。それを計画することがなかなかできませんでした。どういう（単元の）ストーリーに、デザインにするのか自分ではなかなか見通しを持てるものが計画できなかったで、子供だけでなく自分が計画のころから相談にのってもらう必要があったと思います。

15:前園氏のような、専門性が高く、情報発信力があり、人柄が素晴らしいコーディネーターが継続して勝山市の授業に関わって下さるよう希望します。誰でも環境コーディネーターになれるというものではありません。

17:H24 年を見ていると、コーディネーターが関わっている学校が限定されている。これは 1 人しかいないため、どうにもならぬことである。問題は、次年度の環境学習をする際、また同じ学校が前年の延長で関わりをもってもらおうとすると学校間で不公平感が発生しないか？コーディネーターが多く関わっている間に、その学校をあげて環境学習をすすめていくためのシステム等を考える必要はないだろうか？ユネスコスクールのこともあり、特定の教員だけで環境学習・ESD が進んでいくというのは勝山市全体のプラスにはならない。

24:毎回授業に入ってもらったり、資料提供、授業、指導をしていただいたり、いくつもお願ひしているにも関わらず、いつも快く引き受けて下さりととてもありがたく思っています（他校の様子がわからないので、逆にお願ひしすぎかも…と思っている部分もあるくらいです）。

27:連絡がなかなか取りにくいときがあった。

34:前園さん 1 人では多忙すぎる。福井大学と連携ができると良い。学生が 1 人ついていて、出前授業できると良い。教師へ知識伝達のため、何十年か前までであった（らしい）市への出向として、前園さんと 1 年間行動する。環境政策課へ出向できないだろうか。

40:テキストは早めに頂けると良い。次年度以降もコーディネーターの先生がいてくれるのか？もしないなら資料・指導用パワーポイント等、D-Net にまとめていただけるとありがたい。